

シンポジウム「中途失聴・難聴者への理解を求めて」

特定非営利活動法人 東京都中途失聴・難聴者協会
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-15-25 カテリーナ御苑202

助成事業の概要

障害者権利条約制定10年、日本が批准してのち差別解消法も施行となった。しかしながら誰もが人として尊重され、ともに生きる(共生社会の実現)のために何を考え、どのように動くことが大事なのか考える機会も未だ少ないと言える。

「聞こえのハンドブック」刊行後、多くの聞こえない人たちや家族、支援をする人たちに読まれるようになった。それでも社会の側に壁があることを、一般社会に理解されているとは言えない。そのため広く社会に向けてシンポジウムを開催した。「見えない障害」といわれる中途失聴・難聴について、さらに聞こえないことから生じる心理的不安・苦悩などについて専門家・難聴者ご自身からお話を伺った。音声情報だけでは聞こえない人たちは孤立してしまう。自己判断や自己決定にも大きな支障をきたす。

社会が抱える課題と難聴者自ら発信することの大事さを意識できるようなものとした。

10月29日開催。

事業の成果

人は誰でも「見える」障害への対応は考えられる。しかし「見えない」障害に対しては残念ながら思いを馳せることも、その場で行動に移して支援することも難しい。どのように接したらいいか経験が乏しいことが理由のひとつに考えられる。書籍を通して理解できることは多い。それよりも

直接専門家や当事者からの考え・意見・思いを聞くことで、人として尊ぶことを学ぶようになる。

法の枠組みも制度も整いつつある今、大事なことは、まずは自分が動くこと。そうすることで社会が少しずつ変わっていく。一人の小さな声も、社会の壁を切り崩す力になることは間違いない。

前半の4人の発言時間が少し足りなかった面はある。それだけ社会の壁について言及することが多いのだと言える。一番初めに「聞こえと難聴・人としての成長」の話をしていただいた。

1人の人間として、成長する段階で何が壁になるのか分かりやすい内容だった。

必要とする支援等は具体的に伝えていくことだと共有できた。困っていることを具体的に伝え、してほしいことも明確にしていくことで支援にためらう人が減少していく。2番目には聞こえの仕組みや耳の疾患について説明を受けた。医学の進歩は目覚ましく聴覚補償に期待がもてる機器も開発されている。最新の情報も提供できた。

次に機器を活用した聴覚補償を具体的に、そして説明力・受援力を高めることについての話を伺った。「受援力」は馴染みが薄いことばだが、参加者にとって考えさせられるものになった。

最後に、すべての人が自分らしく生きる社会であるために、環境整備への視点は欠かせない、主体的な意思表示をすることで必要な配慮は受けられることを認識できた。後半は会場からの

質問も受けて、参加者一人一人が社会の一員として考えること、行動することで壁が低くなることを共通認識できた。

■ 成果の広報・公表

情報バリアが当たり前の社会に生きてきて、聞こえは自分の問題と捉え、自分の努力が足りない、もしくは我慢すればいいのだと考えてきた中途失聴・難聴者は多い。しかしそうではないと参加者の意識に訴えることができた。同じ市民として地域であらゆることに挑戦し、自己の可能性を追究することが当然だとの考えも深まってきた。何が差別にあたるのか、当事者が発信することも少しずつだが増えてきた。法整備が後押しているのだと言える。他の人の発信を待っていては何も変わらないことも理解できた。自ら声を上げることが、社会を変えることになるということも強く共感した。それをいろいろな媒体を通して明らかにしていく。

■ 今後の展開

法の運用は関わる人が具体的な不備も指摘していくことで、より良いものになっていく。制度が充実していくためにも中途失聴・難聴当事者が発信することは重要なである。これまで以上に意思表示をしていくことで、障壁のない社会をつくることができる。社会を構成する地域の人々は障壁のない社会構築のために知識を深め・理解力を強め・ともに生きる意識の醸成をすることが必要になる。協会は日々啓発に努めているが、さらに多くの人と考え行動に移せるようNPO法人の責務を果たしていく。